

京都国立近代美術館所蔵『河井寛次郎展』

河井寛次郎（1890～1966）は、現在の島根県安来市生まれの陶芸家で、大正9年、清水六兵衛の窯を譲り受け、独立、京都五条坂に窯を設け、生涯そこで作陶しました。（現在、河井寛次郎記念館として公開）。初期には、中国や朝鮮の陶磁器に倣った精緻な作品を手がけましたが、大正末期より民藝に傾倒、柳宗悦、浜田庄司らと民藝運動を推進しました。戦後は、より自由な造形活動を展開し、陶芸の他、彫刻、デザイン、書や文筆にも優れた作品を残しています。本展は、河井寛次郎の優れたコレクションを誇る京都国立近代美術館の所蔵品に岡山県下に所在する関連作品を加えた約300点により、寛次郎の多彩で造形性豊かな世界を紹介するものです。

【学芸員 福富幸】

6月1日[金]～7月1日[日]
月曜日休館《白地草花絵扁壺》
1939年

主催 岡山県立美術館／京都国立近代美術館

協力 岡山県郷土文化財団

関連事業

・記念講演会

日時 6月16日[土] 14:00～
演題 「河井寛次郎の世界」
講師 松原龍一氏（京都国立近代美術館主任研究員）

・美術の夕べ（夜間開館）

日時 6月22日[金] 18:00～19:00
演題 「河井寛次郎展をみる」
講師 福富幸（当館学芸員）

ピカソ展—ルートヴィッヒ美術館コレクション

パブロ・ピカソ（1881-1973）は、20世紀美術を語る上で欠くことのできない芸術家です。ピカソは、印象派の影響を受けた初期を経て、「青の時代」「バラ色の時代」「キュビズムの時代」「シュルレアリズム」と、生涯に渡って次々と様式を変化させ、多様な作品を残しました。

本展は、20世紀美術の豊富なコレクションで知られるルートヴィッヒ美術館（ドイツ）が収蔵するピカソ作品約100点を、表現様式の変遷をたどりながら紹介するものです。

晩年のピカソと親交のあった写真家ロベルト・オテロによる写真30点も展示し、アトリエでのポートレートをはじめ、闘牛に熱中する様子や家族との一枚など、人間味に溢れるピカソの表情を垣間見ることができます。どうぞお楽しみに。

なお、会期中の金曜日は19時まで開館しています。ごゆっくりご覧下さい。

【学芸員 細田樹里】

7月24日[火]～8月26日[日]
月曜日休館（8月13日は開館）

主催 岡山県立美術館／テレビせとうち／山陽新聞社

関連事業

・美術館講座

日時 8月4日[土] 14:00～
演題 「ピカソの名作を訪ねて」
講師 廣瀬就久（学芸員）

・美術の夕べ（夜間開館）

日時 8月24日[金] 18:00～
演題 「ピカソ展をみる」
講師 細田樹里（学芸員）



ただいま準備中 坂田一男展 [後編]

坂田一男展の準備は、作品調査、出品交渉が佳境に入っています。出品交渉はほぼ終わりかけていますが、作品や文献の調査はまだまだこれからです。大きなニュースがあります。坂田一男の油彩・グッシュ・デッサンが大事に保管されていることが判明しました。写真撮影とデータの計測を行い、さらに油彩作品については、吉備国際大学の大原秀之先生に修復の必要な作品のチェックをしていただきました（坂田一男の作品は、アトリエが玉島の干拓地にあり、昭和19年と29年の台風による高潮で塩水を被ったため、アトリエにあった作品には状態のよくないものがあるのです）。また、自筆原稿や前衛岡山の展覧会ポスターなども保管されていて、初めて紹介する作品、資料も多く見つかり、展覧会は興味深いものになりそうです。

これらの作品・資料は今後の坂田芸術研究の大きな手がかりになるでしょう。

【主任学芸員 妹尾克己】



第3回A.G.O.展ポスター

最新刊行物

中高生のための
もっと伝統工芸
鑑賞ガイド図工でも使える 学級でも使える
鑑賞ガイド
—アートゲーム編ー

(2007.3.31刊 500円)

図工でも使える 学級でも使える
鑑賞ガイド
—アートゲーム編ー岡山県立美術館吉吉康雄教材
開発研究会発行 (2007.3.31刊)『描かれた桃太郎』展
カタログ

(2007.4.20刊 300円)

展覧会

京都国立近代美術館所蔵
河井寛次郎展
6月1日(金)～7月1日(日)

ピカソ展
—ルートヴィッヒ美術館コレクション
7月24日(火)～8月26日(日)

第58回
岡山県美術展覧会
9月5日(水)～9月16日(日)

坂田一男展
9月28日(金)～11月6日(火)

美術館講座 事前申込み不要（聴講無料、先着順）

- ◆6月16日(土) 「河井寛次郎の世界」
講師：松原龍一
(京都国立近代美術館主任研究員)
- ◆7月7日(土) 「モティーフとしての静物
——成立からキュビズムまで」
講師：細田樹里（学芸員）
- ◆8月4日(土) 「ピカソの名作を訪ねて」
講師：廣瀬就久（学芸員）

時間 14:00-15:30
開場は13:30会場 ◆地下1階講義室
◆2階ホール

社会人のための 美術の夕べ

- 6月22日(金) 「河井寛次郎展をみる」
<福富>
- 7月27日(金) 「岡山の美術をみる—洋画編②ー」
<齋藤>
- 8月24日(金) 「ピカソ展をみる」
<細田>

各特別展観覧料が必要です
●「岡山の美術」(常設展) 観覧料が必要です
時間 18:00-19:00
会場 当館 展示室
< > 担当学芸員

編集後記

先日ラジオで、ドイツ文学者で翻訳家としても活躍する池内紀氏が、「翻訳は結婚のようなものだ」と言っていた。作品に恋をして契約したのは良いが、なかなかどうして「好き」だけではやっていけない。素直なところは好ましいが、意固地に手に負えない部分がどうしてもある。しかしそれらを乗り越えて、翻訳はなされていくのだ、と。そういういは、うちの上司もよく言っている。研究の過程では、幾度かその作家や作品が嫌になる。しかしそれらを乗り越えた先に、喜びはあるものだ、と。

当館がこれまで紀要を出していくことから、本ニュースは、当館にとって研究を発表する場としての機能も担ってきた。昨年度は、書くことが負担になるのではなく編集者が勝手に思い込んで、「研究ノート頼みます」となかなか同僚に言えなかったが、本年度はそのようなことがないようにと考えている。さて、池内氏がその後リクエストしたのは、トニー谷の「こんなに変るものかしら」であった。結婚後に激変したパートナーを歌った曲である。

美術館ニュース 77号

発行：2007年6月
発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市天神町8-48
TEL 086-225-4800
URL <http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/index.html>
E-mail kenbi@pref.okayama.jp

ISSN 0916-9466
R100
古紙合算率100%再生紙を使用しています

本圖は、浦上春琴（一七七九—一八四六）が没する二年前、天保五年四月に描いた青緑山水の大幅である。画面下方からジグザグ状にゆづり廻っていくと、建築物や鶴、人物、樹木などが次々と現れる。鑑賞者を文人たちの理想郷へと誘っていく。盛りだくさんのモチーフが画面を覆うが、息苦しさよりもむしろ雅やかで格調高い雰囲気さえ漂わせている。

浦上春琴 「懐山清曉図」

春琴は、玉堂の長男として備前岡山城下に生まれ、少年の頃より詩画に才を發揮する。寛政六年（一七九四）、父の脱藩に同行して岡山を出奔、やがて京都を活動の拠点とした。自由奔放に独創的な水墨山水画を描いた父玉堂とは異なり、写生に基づき基礎をよく温めで気品のある山水・花鳥を描いた。

主任学芸員 中村麻里子

鍵岡館長の 美術隨想

この5月に神奈川県横須賀市に横須賀美術館が誕生した。東京湾の入口・三浦半島突端の観音崎に近い海岸にむかって建つ美術館の前の海を大きな船舶が盛んに往来する。お隣り逗子市には3年前に神奈川県立近代美術館葉山が開館、御用邸に隣接する海岸に面した美術館である。風光に恵まれたふたつの海岸美術館へ行くのは少しリゾート気分で、明るい開放的なモダン建築に迎えられて美術を楽しめる。

横須賀美術館の開館記念展は20年以上かけて蒐集してきた1960年代までの日本近代の絵画展で「近代日本美術を俯瞰する」展とて、目配りのよい絵好きするコレクションである。同時に「現代作家9人のアリティ<生きる>」展では、絵画・彫刻・オブジェ・ビデオ・写真・インスタレーションと多様に拡大する美術の現存の意味を賑やかに問いかける。一方、前庭には敬愛する若林奮の「風景彫刻」と僕が勝手に呼称する巨大な鉄面の谷道《ヴァリーズ》（1989年作）が設置され、沈思黙考させる。若林の彫刻展は来年2月に開催の予告があった。

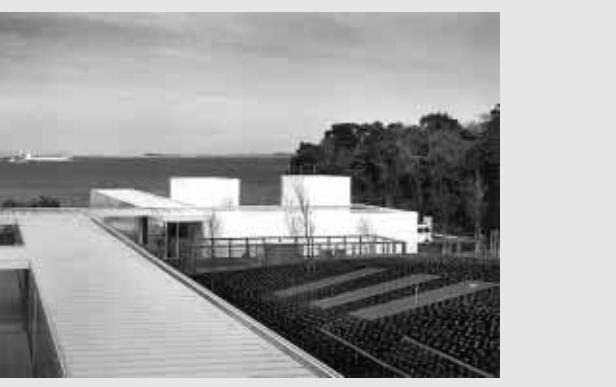
神奈川県立近代美術館葉山も所蔵品展で開催し、年5・6回の企画展で8万人を超える入場者で、まずは順調である。というよりは、葉山に本館を移したとは云え、鎌倉に1951

近ごろの美術館 指定管理者制度の導入で思う

本館も平成19年4月より、建物の維持管理など一部業務について指定管理者制度を導入した。指定管理者制度は、平成15年度に地方自治法が改正され、従来は自治体出資法人に限られていた公的施設の管理運営を民間事業者にも行わせることができるというものである。全国的にも公共施設がその全体または一部を指定管理者に委ねるという状況がみられるようになっている。公立の文化施設といえど、もはや資本主義と無縁の聖域ではないのだ。

当館が指定管理者制度を導入したのは、施設管理、警備、清掃といった区分の業務である。一般的な利用者の中には、

公立施設の運営方法やサービスについて何かしら不満をお持ちの方もいると思う（中にはいる私ですらそう思うことがあるのだから）。サービスが向上し、経費を節減できるなら施設全体を指定管理者に委ねればよいではないかと考える方がいても決して不思議ではない。しかし、美術館や博物館といった施設には、サービスや経済効率を数値化して評価することが困難な分野がある。特に学芸部門が担当する学術的、芸術的な調査・研究・展示といった分野は、そのような方法では決して評価すること



横須賀美術館 撮影：大橋富夫

年（昭和26）に開館した神奈川県立近代美術館は、翌年開館の東京国立近代美術館とともに、今日に至るまでの公立美術館の基本モデルとなった。

戦前までの美術館・博物館は10館に満たず、収蔵品は日本の古美術を中心であり、西洋近代美術は彼らが大原美術館が唯一であった。今日では国公私立の公認される美術館だけで300館をこえる。一見して隆盛とみえる日本の美術館の現状は「冬の時代」といわれ、文化政策の不在、不十分な予算、専門スタッフの不足に悩まされ、独立行政法人化、指定管理者制度導入などで閉館の危機にあるところもでたらである。芦屋市や伊丹市両館がそれで、アイウエオ順だと関西のお笑いにまぎらわせている。こうした時にこそ、美術館とは何なのかと根本的に問い合わせ直す必要がある。

（次号へつづく）【館長 鍵岡正謹】

新収集品紹介 拙宗等揚（雪舟等揚）筆 《出山釈迦図》

本年5月、わが館では久方ぶりに作品購入が行われた。計5点と少数だが、内容的には岡山ゆかりの美術を収集、展示する当館にとってきわめて大きな収穫であった。これらはいずれも本館主催の展覧会における公開歴を有する作品であるが、今後は館蔵品として『常設展』で積極的に活用していきたい。

さて、ここで紹介するのは拙宗等揚筆《出山釈迦図》である。この作品は雪舟に関する殆どすべての画集や展覧会図録に掲載されており、読者はお馴染みの作であろう。ただし、筆者の拙宗については、これまで雪舟との同一人説が有力であったとはいえ、結論づけられていたわけではなく、拙宗は雪舟周辺の水墨画家として扱われてきた経緯がある。しかし近年の研究の進展に伴い、**拙宗**号は、昨秋山口県立美術館で開催された『雪舟への旅展』において示されたように、岡山県出身の雪舟等揚（1420-1506）が入明（1467）直前に雪舟と改号する以前の号と解釈するということで決着をみている。

本図は、釈迦が出家して山林に入り、肋骨が透けるほどの苦行を6年間続けたものの、苦行が無意味なものであったことに気づいて下山し、眞の悟りへと向かうという仏伝の一場面を主題とする。頭髪、頬や顎のひげ、そして足先の爪も伸び放題と、みると憔悴した釈迦を描いたものだが、画風自体は室町水墨画として決して特異なものではなく、水墨のみの描法もいたって簡潔である。しかし、速く伸びやかな線で対象を的確に把握する筆技は熟練の域に達している。本図は数点の遺作が知られる拙宗の人物画の中でもとりわけ優れた出来栄えを誇り、雪舟が多く描いたはずの釈迦人物画の大半が世に伝わらない現在においては、殊に意義深い作と評せるだろう。ともあれ、制作からおよそ550年を経て、故郷の本館に収められたことを奇とし、嘉としてご報告させていただきます。

なお、本作以外の購入品は次の通り。

- ・宮本武蔵像（宮本武蔵展出品） 尾形探香筆 松浦詮賛 紬本着色 1幅 100.6×37.2cm 江戸時代後期（1853-56） 詳細は本館ニュース第63号参照
- ・春山雨圖（浦上玉堂展出品） 浦上玉堂筆 絹本着色 1幅 21.5×20.0cm 江戸時代（19世紀）
- ・S-004（東島毅展出品） 東島毅作 ミクストメディア・キャンバス 1面 305.0×397.0 1996年
- ・F.M.F-M（東島毅展出品） 東島毅作 ミクストメディア・キャンバス 1面 307.0×391.0 2000年



拙宗等揚（雪舟等揚）筆
「出山釈迦図」
紙本墨画
1幅 83.3×33.5cm
室町時代（15世紀）

展覧会後記 「東島毅展」を終えて

2月9日から3月11日まで開催した「東島毅展」は、2,975名の来館者をお迎えして、無事終了した。展示室横幅4メートルの間が塞がれることなく、東島さんの巨大なキャンバスを遙かに見渡すことのできたユニークな展示空間も、もはや記憶のなかに留まるのみとなつた。

現代美術展を企画したのは今回が初めてだったが、作家との共同作業を経ながら、最新の動向をも紹介するということは、その作家のキャリア形成に関わるということであり、歴史的検証を第一の目的とする、過去の作家の展覧会とは、根本的に意味合いが異なってくるものなのだと理解した。

展覧会開催までの準備期間を含めると、今回の展覧会は足かけ3年にわたる道のりになった。比較的良好だったと思われる点、そして反省が必要な点、双方とも認識しているが、近くからも遠くからも、もっと多くの方々から、ご意見を頂戴したかった。これは過去3回の、自らが企画に携わった展覧会全てにおいて共通している。何となる暖簾に腕押しのような気持ちになるのが、とても寂しい。

なお会期中、当館ホームページ上に掲載した、「担当学芸員＆ボランティア日記」は、当分の間、同ホームページ上にて閲覧が可能です。展覧会開催時の雰囲気を残す本欄を、よろしければご高覧ください。

会期中から現在まで、沢山頂戴した質問が、「次回



地下屋内広場でのインсталレーション
(左) 建築者の等身大として
(右) 通り過ぎる場所としての絵画

地元の簡素さに見入ったという（註8）。

その旅の前後や

途中で、長谷川はいくつかの雪舟作品の複製をノグチに見せた。

少なくとも、《秋冬山水図》・《山水図(破墨山水図)》(以下《破墨山水図》と記す)・《四季山水図(山水長巻)》(以下《山水長巻》と記す)を見せていている(註9)。

長谷川は、高校生の頃から雪舟作品に魅了され、その

ような複製を大学生の頃から古本屋で買いました。

ノグチは日本人を父にもつ氣鋭のアメリカ人アーティストとして祭り上げられ、連日、講演会や取材などに引張り出されてしまう(註5)。同月11日、東中野で行われた日本アヴァンギャルド美術家クラブの有志による歓迎会に出席したノグチは、そこで自分と雪舟作品を引き合せる人物に出会うことになる。歓迎の挨拶をした抽象画家の長谷川三郎(1906-1957)である(註6)。

このとき初めて雪舟作品に触れたノグチは、それ

を激賞する。

《秋冬山水図》の「冬景」にかかる霧の力と重量感を誉め、《破墨山水図》の爆発する

ような強さを称えた。

そして《山水長巻》にいたつ

て、幾度となくひろげてくれるよう長谷川に頼んだ。

そして穴が開くほど見つめ、見とれてはため息をついたのである。(註11) (次号へつづく)

【学芸員 山吹知子】

研究ノート

イサム・ノグチ作《Sesshū》について

あまり知られていないが、彫刻家イサム・ノグチには《Sesshū》という作品がある(国版、註1)。制作は1958年で、同時期に《Noh-Musicians(=能樂師)》といつた、日本文化がそのままタイトルとなった作品があることや、それより遡ること8年前の1950年に、ノグチが来日中に出会った雪舟作品を絶賛したことなどから、この「Sesshū」とは「雪舟のこと」として間違いないだろう。雪舟といえば、言わずと知れた中世の水墨画家で、岡山の人である。20世紀を生きたイサム・ノグチの雪舟観とはどのようなものであったのだろうか。また、ノグチが作品《Sesshū》へ込めた想いとは如何なるものであったのだろうか。本号と次号、2回にわたり迫ってみたい。今号ではまず、ノグチが雪舟作品に出会いまでの経緯を明らかにする。

1904年、イサム・ノグチはロサンゼルスに生まれた。父親は日本人の野口米次郎、母親はアメリカ人のレオニー・ギルモアである。生まれてからまもなくはアメリカで母親と祖母に育てられたが、3歳のとき母親とともに来日した。少年期は日本で育ち、1918年に単身渡米する。アメリカで彫刻家を志し、はじめ具象彫刻を手がけた。1927年、22歳でパリを訪れた際に彫刻家ブランクーシーのアシスタントを務めたことを契機として、自身も抽象彫刻に転向する。以来、生涯を通して石や鉄などの素材を使用した多様な抽象彫刻作品を創造し続けた。また、舞台美術、作陶、建築、造園、プロダクトデザインなど、既存の彫刻概念にとらわれない、幅広い活動を世界各地で展開したことでも知られる(註2)。

1931年、ノグチは渡米後はじめて来日し、それから19年後の1950年5月2日、再び日本を訪れた(註3)。ノグチは来日前から、鈴木大拙の『禅と日本文化』や岡倉天心の『茶の本』『東洋の思想』を愛読するなどして日本文化の知識を深めていた(註4)。そして日本の庭園や古い絵画などに高度な抽象性を見出すようになっていた彼は、日本到着後すぐにでも禅寺や庭園を巡りたいと望んでいた。しかし戦後5年目の日本において、ノグチは日本人を父にもつ氣鋭のアメリカ人アーティストとして祭り上げられ、連日、講演会や取材などに引張り出されてしまう(註5)。同月11日、東中野で行われた日本アヴァンギャルド美術家クラブの有志による歓迎会に出席したノグチは、そこで自分と雪舟作品を引き合せる人物に出会うことになる。歓迎の挨拶をした抽象画家の長谷川三郎(1906-1957)である(註6)。

このとき初めて雪舟作品に触れたノグチは、それらを激賞する。《秋冬山水図》の「冬景」にかかる霧の力と重量感を誉め、《破墨山水図》の爆発する

ような強さを称えた。

そして《山水長巻》にいたつ

て、幾度となくひろげてくれるよう長谷川に頼んだ。

そして穴が開くほど見つめ、見とれてはため息をついたのである。(註11) (次号へつづく)

【学芸員 山吹知子】

註1 『isamu noguchi a sculptor's world』 Isamu Noguchi (1968, Harper & Row, Publishers)

註2 ノグチの生涯については「イサム・ノグチ宿命の越境者」下(下) ドクス昌代(2000年、講談社)を参照にしてまとめた。

註3 「イサム・ノグチと語る(上)」長谷川三郎(東京新聞1950年6月8日 4面)

註4 「イサム・ノグチと語る(下)」長谷川三郎(東京新聞1950年6月9日 4面)

註5 「イサム・ノグチと語る(上)」長谷川三郎(東京新聞1950年6月10日 4面)

註6 「イサム・ノグチと語る(下)」長谷川三郎(東京新聞1950年6月11日 4面)

註7 長谷川の生涯については「長谷川三郎・画・論」長谷川三郎(1977年、三彩社)を参照してまとめた。

註8 「ノグチ・日本」長谷川三郎(雑誌「美術手帖」1950年、8月号、美術出版社)

註9 「ノグチ・ノグチと語る(下)」長谷川三郎(東京新聞1950年6月9日、2面)

註10 「ノグチ・長谷川三郎(雑誌「美術手帖」1950年6月10日、3面)

註11 「イサム・ノグチと語る(下)」長谷川三郎(東京新聞1950年6月9日、2面)